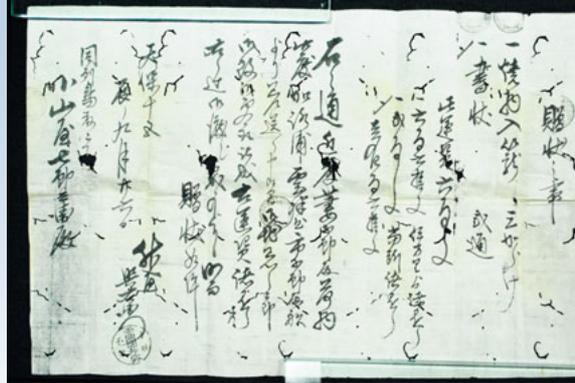




## 因幡国・近藤家から 有田皿山への注文

～天保期の焼き物価格と注文書など～



伊万里から因幡の国までの輸送費が明記された贈(送)状

今年、3月のことでした。鳥取県米子市在住の池田兆一さんご夫妻が来館され、36点の焼き物と入れ物の木箱を寄贈いただき、その後9月にも焼き物46点と木箱、古文書を寄贈していただきました。その読み下しをしたところ、大変興味深い内容でした。

これらの資料は奥様の実家に所蔵されていたもので、その家は代々大庄屋を務めた近藤家の分家でした。古くなって、これらの資料の価値をわかる人が少なくなってきたので、大事にもらえる場所へ寄贈したいという有難い申し出でした。

古文書は4点ありました。その中の1点は手紙で、有田皿山の窯焼き・諸隈喜右衛門から近藤萋五郎へ宛てたものです。これには年号はありませんが、他の資料には「天保十五(1844)辰ノ九月廿六日」という年号がありますので、内容からして、他の3点の資料も恐らくこの年の出来事だろうと推測できます。

手紙には「一昨年(天保13年か)に、伊万里津かあるいは有田皿山に近藤氏が来た折に注文した焼き物を再三焼き直したので、納入が大変遅れてしまったことをお詫びし、お詫びがてら下関の間屋まで持参しようとしたが行けそうにないので、注文した品の残金を送って欲しい。早々に送っていただいた折には尺5部(約32cm)の中鉢を一枚余計に差し上げたい」という内容です。

2つ目の「覚」には焼き物の種類と総数、価格が書かれています。さらに、3つ目の「送り状之事」にはお茶碗や盃、大鉢やさしみ皿などの形とそれに付けた文様、例えば「極山水絵御紋角切之内剣花菱」とその価格が書いてあります。

4つ目の「贈(送)状之事」には、伊万里から因州鳥取まで焼き物を送った際の運賃が書かれています。

江戸時代は、金・銀・銭という貨幣が流通していて、金は江戸を中心とした関東や東国に、銀は京・大坂を中心とした西国、銭は全国的に流通していたことはよく知られていますが、これらの文書資料は大変興味深い事柄を、今に伝えています。それは天保頃の有田焼の価格と、その輸送費がわかることです。

では、近藤家から注文された焼き物は、当時どのくらいの価値のものであったのでしょうか。茨城大学の磯田道史准教授は『武士の家計簿～「加賀藩御算用者」の幕末維新』という著書の中で、人間の賃金から、当時の貨幣の価値を換算しています。天保14年7月の両替データを根拠としていて、例えば、金1両は銀75匁、銭6300文とし、現代の賃金感覚でいえば、金1両は30万円ほど、銀1匁は4000円、銭1文は47.6円、つまり、銭形平次が投げる寛永通宝は1枚が50円玉と換算しています。

それをもとに、近藤家から諸隈喜右衛門へ注文された品々を見ると、茶碗1個は200文から300文、つまり1万円から1万5千円という価格になります。更に、尺5寸の大鉢は1個30万円、近藤家は一度に何と総額約250万円ほどを発注しています。



1枚1両の大鉢

当時の焼き物と、それを裏付ける文書と一緒に残っている例は大変珍しく、池田家のご厚意で、それらの焼き物が170年ほどの時を経て有田へ里帰りしてきました。近日中には皆様にも是非ご覧いただきたいと思えます。(尾崎 葉子)

# 皿 季刊 山

No.92

冬  
2011

# 大木宿に眠る佐賀藩医 水町昌庵先生

## 謎につつまれたその生涯

藤 泰治（有田町大木）

嘉永2年（1849）、佐賀藩10代藩主鍋島直正はバタビアから牛痘苗（ワクチン）を取り寄せ、藩医榎林宗建に命じて世子淳一郎（後の11代藩主直大）に種痘を行った。同年11月、鍋島直正が、江戸屋敷で長女貢姫に種痘を施した際、御前医伊東玄朴の立会人として、大石良英・佐野寿仙・牧春堂らと共に立ち会った医師の一人に水町基門（昌庵）先生がいた。藩主の側近くで、医学上画期的な場に立ち会う程、有能な藩医だったと思われる。

当時、疱瘡（天然痘）は一生に一度は必ず感染する大病で、死亡率も高かった。直正はこれらの結果が良かったことから、「引痘方」という役所を設けて、領民に種痘を施している。有田皿山でも嘉永7年（1854）に有田から伊万里へ種を取りに行かせて、泉山から岩谷川内までの子どもたちを対象に、西光寺や桂雲寺などの各寺で種痘を実施している（川内家文書）。

さらに、佐賀藩では文久元年（1861）8月、「漢方医術を廃し西洋法に改む可し」とお達しが出された。漢方医だった水町昌庵は、漢方医学の優位性を論じ、時代の洋医傾斜を認めなかったためだろうか、その後、忽然と佐賀藩の医学界から姿を消した。

安政5年（1858）ごろ、どのような経緯か記録は残っていないが、水町昌庵は有田郷大木宿に町医として診療所を設け晩年を過している。藤家18代現当主藤辰己さん（71）の先祖が佐賀藩の粉蔵を管理していた時に、その粉蔵で水町先生は寺小屋を開き、地域の人達に読み書きソロバンを教えていた。建物は既に解体され畑になっているが、近くに学問と音楽の神様である弁財天が祀られている。平成6年11月に松尾造酒夫さん（77）が改築奉納されている。

そんなに立派な水町昌庵先生が、何故大木宿に来て、どう余生を過したか詳細を語る人はいない。昭和52年に発行された『教育百年 大山』に、浦郷敬之さんが「水町庵（医）先生を尋ねる」という一文を寄せている。浦郷さんは佐賀県立病院好生館や佐賀県立図書館などに資料が残っていないかどうか、水町先生の足跡を訪ね歩いている。それによれば、13代酒井田柿右衛門夫人が水町家と姻戚関係にあったこと、竜泉寺の北隣り周辺を「水町」と呼んでいたこと、さら



水町昌庵先生のお墓



弁財天祠。左の建物の前に寺小屋に使われていた粉蔵があった

に竜泉寺本堂の裏手に、下記の墓碑を確認している。

- ①水町基門之墓  
明治11年12月23日入 行年 76
- ②水町家先祖之墓
- ③水町作女之墓 明治7年戊8月13日
- ④水町榎女之墓 明治7年戊10月13日

更に①の側に墓石らしいものがあり、恐らく昌庵夫人のものではないかと推測されている。

佐賀藩の中樞で医師として活躍した水町昌庵先生が、なぜ有田大木宿に移ってきたのかわからないが、現在、世の中では漢方医学が見直され静かなブームとなっている。草葉の陰で、水町先生はこの現状をどう思っているのだろうか。

## M E M O

- 佐賀藩は医師の国家試験制度の先駆者で、文化3年（1806）、「学政管見」において「学問ナクシテ名医ニナルコト覚束ナキ儀ナリ」と説いた。
- 「医師免札名簿」に、嘉永4年（1851）亥12月16日 一、内科口科 水町昌庵とある。

## 企画展

# 「江戸の底力・広瀬山400年 ～有田磁器生産の変遷」 を終えて

平成23年10月1日(土)～11月30日(水)まで、企画展「江戸の底力・広瀬山400年～有田磁器生産の変遷」を開催しました。期間中たくさんの方に来館していただき、好評のうちに終了いたしました。

特に今回は、地元広瀬地区の方の来館が多く、「地元の歴史を知りたくて来ました」「ポスターを見て自分の家が写ってるから気になって来ました」などの声を聞くことができました。

期間中、さまざまなイベントを行いました。その様子をご紹介します。

## ギャラリートーク

10月2日(日)、11月23日(水・祝)の2回にわたって、学芸員による展示解説を行いました。1回目は10名程、2回目は14名程の参加者がありました。

参加者はまず、エントランスホールにおかれた大きな広瀬向窯物原層の断面を剥ぎ取った実物に圧倒されつつ展示を見学し、学芸員に時折質問しながら、2時間にわたる熱い解説を受けました。

「辰砂の技術が素晴らしい」「膨大な量の陶片に有田の歴史の重みを感じる」といった感想をいただきました。



学芸員の解説を聞く来館者

## ふるさと学 広瀬山ば歩こう

好天に恵まれた11月16日(水)、有田町公民館と共催で行っている「ふるさと学」の一環で、広瀬山地

区を歩きました。まずバスで竜門ダムへ向かい、付近の龍門磁石場やタバコ観音などを見学。その後、広瀬山の集落部へと移動して、企画展の要でもあった広瀬向窯跡一帯を散策しました。

山道がきついところもありましたが、初めて訪れた場所も多く、参加者のみなさんの楽しそうな顔が印象的でした。



視線の先に龍門磁石場がある

## 夜間開館・紅葉ライトアップ

資料館の紅葉がやっと色づき始めた11月19日(土)、20日(日)の2日間、恒例となった資料館周辺の紅葉ライトアップと、それに併せて企画展の夜間開館(18:00～20:00)を行いました。



資料館周辺には100本ほどの紅葉があり、例年11月中旬には、赤や黄色のグラデーションで目を楽しませてくれますが、今年は少し時期がずれました。

この紅葉ライトアップは、役場職員有志の協力で、平成20年より毎年行っています。

昼の紅葉とはまた違った、夜の紅葉を楽しむ人々の姿が見られました。

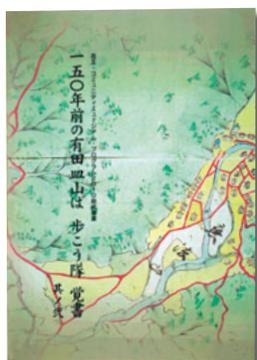
上：資料館の紅葉(昼間)  
下：夜間開館中の資料館(ライトアップ)

# 「150年前の有田皿山ば 歩こう隊」

## 「150年前の有田皿山ば 歩こう隊 覚書 其ノ貳」が完成しました

平成23年9月28日(水)、有田町生涯学習センターにて「150年前の有田皿山ば 歩こう隊 覚書 其ノ貳」の完成披露会が行われました。

隊員の活動の成果をまとめたもので、下記の場所にて販売しています。また、内山編とセット割引もありますので、この機会にぜひお求めください。



### 販売場所

- ・有田町  
歴史民俗資料館
  - ・有田館
  - ・有田観光協会  
(旧有田観光  
情報センター)
- 価格：1000円

※内山編(1,500円)とセットで購入された場合は、2,000円(500円割引)となります。

## 「150年前の有田皿山ば 歩こう隊」 Part IIIのご案内

平成22年から継続して行っている「150年前の有田皿山ば 歩こう隊」ですが、3年目も助成を受けることが出来ました。1～2年目の活動中、隊員から次のような声が上がっていました。それは「自分たちが調査をして知りえた有田の素晴らしい歴史を、次世代を担う子どもたちに継承したい」というものでした。

そこで、3年目の活動は子どもたちを中心とした次世代への普及活動を行うことになりました。具体的には以下のように計画しています。

### ① 小中学校へ出張パネル展示 期間：1月～2月

「150年前の有田皿山ば 歩こう隊」の活動をパネルにして各学校で紹介します。

### ② 有田皿山ば 歩こう(仮) 期間：春休み、夏休み

パネル展のアンケート結果にもとづいて、好評だった地区を実際に歩いて、写真や絵で表現してもらい、展示します。

後日、参加募集のお知らせをしますので、その時はふるってご参加ください。

◎お問い合わせはこちらまで

アリタ・ガイド・クラブ ☎ 050-5539-5349

有田町歴史民俗資料館 ☎ 0955-43-2678

## ちよつとイイ話

当館と有田町公民館との共催で実施している「古文書教室(初級・中級)」があります。初級クラスのテキストとして唐津の商人・平松儀右衛門が書いた旅日記を読み終えたところに、時あたかも、子孫の平松拓さん(九州大学教授)から電話がありました。

お話によれば、祖父の代まで唐津市山本で酒造業を営んでいたそうです。また、儀右衛門さんは30代で家督を子に譲り、お茶や歌など趣味に生き、日頃から色々なことを記録していたそうです。この資料の存在は代々平松家に伝わってはいたものの、その文字の難解さに長期戦を覚悟していた平松さんでしたが、有田での取り組みをととても喜んでいただきました。

旅日記の冒頭には、これを記す目的として「年経て子孫の便りともすべきこと」とするとありますが、今まさに150年ほどの時を経て、先祖の言葉に触られた子孫の喜びに、古文書教室受講生の方々と共に喝采をあげたいと思います。

## 有田中学校2年生による 職場体験

毎年恒例となった、有田中学校2年生による職場体験が、9月14日～16日の3日間にわたって行われました。今年の参加者は古賀大陸君、池田佳永君、野中雄太君、中山将吾君の4名。毎日朝早くから資料館周辺の落ち葉をきれいに掃除し、仕事を開始。

主に発掘した陶片の整理作業を体験し、さらに10月1日から始まった企画展の準備作業を手伝って貰いました。子ども達の「博物館ってどんなことをしているのだろう」という疑問に答えることができ、資料館としても嬉しく思います。

## 季刊『皿山』

通巻92号(平成23年12月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185